

保護者とのコミュニケーション・連携の基盤としての 「聴く力」に関する幼稚園教員・保育士の意識

— 特別支援保育臨床の課題と今後のあり方への示唆を中心に —

栗原輝雄*

「聴く力」を保護者とのコミュニケーション・連携の重要な基盤ととらえ、幼稚園教員・保育士を対象に、保護者の話を聴くさい、どのようなことが大切であると考えているかを質問紙法によって調査した。回答傾向として、保護者との普段からの信頼関係を築いておくことを土台としながら、実際に保護者の話を聴くときはサポートティブな姿勢で話を聴き、保護者と一体となって子どもの個々の問題や課題への支援と、子どもの教育（保育）・発達支援、保護者の子育て支援、保護者自身の抱える問題や課題に協働して取り組むスタンスを大切に、また実践しようとしている姿が浮き彫りにされた。この傾向は特別支援学校教員の回答傾向と類似していた。一方で、保護者の話が途中で滞ったりした場合、じっくり待つということや、必要に応じて専門機関との連携を図るといった点についての評価順位は低く、場合によっては、善意による教師・保育士主導の話しを進め方、問題の抱え込みといった状況につながりかねない一面も存在しているようにうかがえた。しかし、全体としてみれば、特別な支援を必要とすると思われる子どもや、子育てに不安を抱いている保護者に対しては「セキュア・ベース」として大きな役割を果たしうる聴き方を心がけている傾向のあることが知られ、特別支援保育臨床のあり方に有益な示唆を与えてくれているように思われた。

キーワード：保護者 コミュニケーション・連携 聴く力 幼稚園教員・保育士 特別支援保育臨床

I 問題および目的

保護者は子どもの各発達段階において、子どもの直面する課題や問題への対処のため、あるいはよりいっそうその子らしい成長・発達のため、さまざまな支援を試みる。しかし、時には保護者の思い通りに事が進まず、保護者自身が大きなストレスに見舞われることもある。また、子どもの問題や課題、あるいは子どもの将来像をめぐって、両親間あるいは家族間での意見の食い違いや衝突が生じ、両親双方が情緒的混乱に見舞われることもある。障害のある子をもつ保護者の場合、「健常な」きょうだいの態度・心理や行動をうまく読み取れずに、親子・両親間に微妙な情緒的不調和が生じてしまう場合もある。そしてこれが長く尾を引いてしまう場合、その不調和が家庭の雰囲気や緊張とよどみとを生み出し、障害のある子自身と「健常な」きょうだいの双方の成長・発達の基盤を揺るがすことにもなりかねない。どの年齢段階の子どもにとってもそうであろうが、特に幼児の場合、家庭環境によって情緒は大きく左右されると思われる。この意味で、幼児に対する保護者や家族構成員の安定したかわりは発達の基盤として大きな役割を果たすと思われる。発達障害その他の障害のある子どもについては、特にこうした点についての十分な配慮が必要であろう。

保護者の情緒的安定のためには、両親それぞれにおける心理的ストレスの軽減、あるいは除去が大切である。このためには、特に周囲にそうした両親のストレスや悩みや不安等を聴くことのできる人の存在することが大きな意味を持つと思われる。人は、自身のこころの中に溜め込んだものを安心できる場で、信頼できる人に表出することでストレスを軽減・除去できると思われるからである。⁽¹⁾ ドナルド・マイケンバウムという言葉を借りれば、「コミュニケーションと主張（自己表現と言い換えてよいかもしれない—筆者注）の技術を身につける」ことがそのためには必要となるということになるであろうか。⁽²⁾

医師や心理臨床家（臨床心理士など）等のこころの専門家や教師（保育士）、同じ問題を抱え解決に取り組んでいる人々（親の会・自助グループなど）などは、聴き手として大きな役割を担う人たちということができよう。以上のことをたとえば、最近、保育臨床や臨床発達心理学、学校臨床心理学、教育心理学などの分野でも大きな話題・課題となっている発達障害やその他のさまざまな障害のある子を主に念頭において進められている特別支援教育（保育）臨床の観点から少し補足しておきたい。⁽³⁾

子どもの障害は家族のつながり（きずな）をさらに強める方向に働いたり、逆にそれを弱めてしまう方向に働いたりすることもあるが、「障害のある子どもとともに生きていきさい、子どもの障害は両親双方の側に強い情動（不安、頼りなさ、自責の念、怒りなど—筆者注）を

* 三重大学教育学部特別支援教育講座

引き起こす」と、おそらく自身の体験に基づいてであろうが、Featherstone, H (1980) は述べている。この点からすれば、子どもの障害は両親双方にとって、人生の重大出来事の一つと数えられるかもしれない。人は自身に起こった重大な出来事について、その意味を精査することで自身の人生に統合していく（いわゆる「受容する」というということ）道が開かれるという。⁽⁴⁾ しかし、その意味を当事者（両親）だけで見出していくということには相当な困難を伴うのではなかろうか。多くの人たち（その方面の専門家と呼ばれる人たちのみならず、教師・保育士など直接子どもとかかわっている人たち、自助グループなど）とのコミュニケーション・連携がここで大きな意味を持ってくると言える。時間はかかるかもしれないが、こうした人たちとのコミュニケーション・連携を通じ、納得できる考えに行き着くことが大切であり自然であろう。⁽⁵⁾ これは、障害のある子の場合に限ったことではない。発達途上にあり変化に富んだ幼児期の子どもの場合、両親は成長に伴って生じる子どものさまざまな「問題」にこころをかき乱され、ストレスに見舞われることが少なくないからである。

ところで、納得できる考えに行き着くためには、既述のように時間もさることながら、自身の感情や思いを表出する場（相手）を持てることも重要であろう。このとき、両親のそうした感情や思いを、安心できる雰囲気の中で静かに共感的に受けとめてくれる人がいることは大切である。⁽⁶⁾ 最も身近なところでいて、日常的に子どもの様子をつぶさに見ている教師や保育士はそうした役割を担うことのできる最適な人たちといえる。教師や保育士が上の役割をうまく果たすことができるなら、幼児を持つ保護者は大きな安心感をもってわが子とよりポジティブにかかわる力を得ることができよう。そしてこのことは、結果的に幼児の発達・教育（保育）支援の大きな力として働くことと思われる。

本研究は「聴く力」というものを教師（保育士）の専門性の一つととらえ、具体的には教師（保育士）の「聴く力」としてどのようなものが大切であると考えられるか。この点を、日々、幼児児童生徒とかかわっている現職教員（保育士）に対して行ったアンケート調査から検討しようとした一連の研究の一部である。本報告では以下の二点について検討する。

- ① 幼児をもつ保護者の話を聴くさい、幼稚園教員や保育士がどのようなことを大切な点としてとらえているかを明らかにする。
- ② 特別支援保育臨床（特別な支援を必要としていると思われる幼児への保育・発達支援と保護者への支援）を進めていくさい、教師（保育士）が保護者の話を聴く時のポイントとなると思われる事柄についての示唆を得る。

II 方法

1. 調査の方法および手続き

(1) 調査票について

保護者の話を聴くときに教師（保育士）自身の目で見えて大切であると思われるものをあらかじめ用意した12の選択肢（「その他」を含む）の中から自由に選んでもらう（複数回答可）方式と、「その他」を除く他の11項目のそれぞれについて大切と思う程度を5段階評定してもらった方式との両方を用いて行った。

質問文と12の項目を次に記す。最初に前者の方式（以下、一回目の調査と称する）の場合、次に後者の方式（以下、二回目の調査と称する）の場合を記す。

1) 一回目の調査の場合

「保護者の話を聴くときに、どのようなことが大切だとお考えでしょうか。該当する項目の番号を○で囲んでください。（複数回答可）「その他」を選択された場合は、その内容を（ ）内に具体的に記してください。

1. 保護者の言葉の奥にある気持ちを読み取れるように努める。
2. 子どものことを教師自身が大切に思っている気持ちが伝わるような対応を心がける。
3. 保護者と共に子どもの課題や問題などに取り組もうとしている気持ちが伝わるような対応を心がける。
4. 普段から信頼関係を築けるように心がけ、その上立って対話ができるよう心がける。
5. プライバシーを必ず守ることを約束する。
6. 子どもの問題について話すとき、保護者を責めるような話の進め方をしない。
7. 保護者の話を受容的・共感的に受けとめるよう努める。
8. 途中で話をさえぎったりせず、保護者が話しやすい雰囲気を作ることができる。
9. 必要なときには、関係機関を紹介したり、それらと連携を図るなどして、問題解決に努めることができる。
10. 保護者の話が途中で滞ったとき、じっくり待つことができる。
11. 保護者の話の中から、学校（園）に対する要望や不満などがあることを察したときは、必要な対応を取ることができる。
12. その他（ ）

2) 二回目の調査の場合

「保護者の話を聴くとき、以下のそれぞれの項目につき、どの程度大切だとお考えでしょうか。「非常に大切…5」「かなり大切…4」「やや大切…3」「余り大切

でない…2」「ほとんど大切でない…1」とし、これらのうちからご自分のお考えに最も近いもの一つを選び、項目末尾の（ ）に数字でお答えください。

1. 保護者の言葉の奥にある気持ちを読み取れるように努める。()
2. 子どものことを教師（保育士）自身が大切に思っている気持ちが伝わるような対応を心がける。()

(以下、省略)

3～11の項目についても、前者の方式に用いた項目と内容はまったく同じであるが、項目末尾に（ ）を付し、ここに大切と思う程度を記入してもらった点が異なる。

3) 2つの調査票の作成と実施について

一回目の調査を実施したさい、回答者の一部から、どの項目も大切だと思うがあえていくつかに絞った、というコメントがあった。これは基本的にはどの項目も大切なものという考えを回答者が持っているが、無理をして選択していた場合があったというメッセージとして受けとめる必要があるのではないかと考えられた。しかし、一方では、自然に選択している回答者も少なからずいたことも予想される。したがって、一回目調査の場合は、上のような課題も含んでいることを踏まえた上で集計しておき、一回目の調査の場合の回答者とは別の回答者に協力を依頼し、各項目を大切と思われる程度によって答えてもらうことで第一回目の調査方式による問題点をカバーした。

4) 調査票の作成過程について

別の論文(栗原、2008、印刷中)に詳細に記しているので、ここでは割愛させてもらう。

(2) 調査の手続き

1) 調査協力者

A 県および B 県の幼稚園・保育園の教員・保育士である。

第一回目の調査協力者：幼稚園教員 31 名

第二回目の調査協力者：幼稚園教員 63 名・保育士 23 名(合計 86 名)

2) 手続き

筆者作成の調査票を筆者の関係する研修会等への参加者に配布し、調査の趣旨に賛同してくれた人たちに回答してもらった。回答時間は 5～10 分位。

3) 調査時期

2007 年 7 月下旬～11 月上旬。

(3) 結果の集計方法

各項目につき、選択された項目の度数・パーセント(第一回目の調査、幼稚園教員のみ)と、各項目の 5 段階評定値(第二回目の調査、幼稚園教員・保育士)を算出し、項目間および勤務年数によって回答者の「聴く力」の内容についてのとらえ方にどのような違いがあるのかについて検討した。

III 結果

1. 幼稚園教員(保育士)の回答傾向

第一回目の調査結果(この時は幼稚園教員のみ)を Table 1 に示す。他校種の教員の回答結果についても比較参照してもらうため記しておく。

幼稚園教員の場合、最も高率で選ばれたのは、「2. 子どものことを教師自身が大切に思っている気持ちが伝わるような対応を心がける。」(90.3%)で、次が「6. 子どもの問題について話すとき、親を責めるような話の進

Table 1 勤務校種別

	幼 (n=31)	小 (n=53)	中 (n=52)	高 (n=42)	特支 (n=60)	全体 (n=238)
1	20 (64.5)	29 (54.7)	29 (55.8)	23 (54.8)	45 (75.0)	146 (61.3)
2	28 (90.3)	38 (71.7)	37 (71.2)	29 (69.0)	42 (70.0)	174 (73.1)
3	24 (77.4)	33 (62.3)	38 (73.1)	27 (64.3)	43 (71.7)	165 (69.3)
4	24 (77.4)	35 (66.0)	40 (76.0)	26 (61.9)	45 (75.0)	170 (71.4)
5	17 (54.8)	22 (41.5)	22 (42.3)	22 (52.4)	34 (56.7)	117 (49.2)
6	25 (80.6)	32 (60.4)	32 (61.5)	24 (57.1)	36 (60.0)	149 (62.6)
7	21 (67.7)	38 (71.7)	33 (63.5)	21 (50.0)	43 (71.7)	156 (65.5)
8	17 (54.8)	19 (35.8)	28 (53.8)	20 (47.6)	36 (60.0)	120 (50.4)
9	15 (48.4)	19 (35.8)	23 (44.2)	29 (69.0)	37 (61.7)	123 (51.7)
10	14 (45.2)	15 (28.3)	25 (48.1)	16 (38.1)	21 (35.0)	91 (38.2)
11	15 (48.4)	27 (50.9)	29 (55.8)	19 (45.2)	34 (56.7)	124 (52.1)
12	1 (3.2)	7 (13.2)	4 (7.6)	0 (0)	3 (5.0)	15 (6.3)

() 内はパーセントを表す

Table 2 各項目の評定平均値（幼稚園教員・保育士）

	10年未満群 (N=47)	10年以上20年未満群 (N=21)	20年以上群 (N=18)	全体 (N=86)
1	4.54	4.70	4.61	4.62
2	4.63	4.84	4.56	4.68
3	4.60	4.74	4.47	4.60
4	4.53	4.53	4.77	4.75
5	4.83	4.77	4.67	4.76
6	4.75	4.70	4.77	4.74
7	4.34	4.52	4.57	4.48
8	4.41	4.58	4.41	4.47
9	4.31	4.23	4.34	4.30
10	4.34	4.15	4.18	4.22
11	4.48	4.32	4.33	4.38

め方をしない。」(80.6%)、そして以下、「3. 保護者と共に子どもの課題や問題などに取り組もうとしている気持ちが伝わるような対応を心がける。」(77.4%)、「4. 普段から信頼関係を築けるように心がけ、その上にたって対話ができるよう心がける。」(77.4%)、「7. 保護者の話を受容的・共感的に受けとめるよう努める。」(67.7%)、「1. 保護者の言葉の奥にある気持ちを読み取れるように努める。」(64.5%)などが続いている。これらは教師が保護者との普段からの信頼関係の構築・強化に意を配りながら、保護者と向き合うさい、サポート的なスタンスで保護者の話を聴き、保護者と一体になって子どもの問題解決とすやかな成長のための教育(保育)・発達支援に取り組む姿勢を大切に考えようとしていることをあらわしているように受け取れる。またそれを保護者に感じ取ってもらえるよう願っているように感じられる。このように幼稚園教員が保護者の話しを聴くさいに大切であると考えて選択した項目は、選択率の順位については多少異なるところがあるものの内容的には特別支援学校教員の回答結果ともよく似た傾向を示している。なお、保護者の話を聴くときに大切と思われることとして幼稚園教員が選んだ「12. その他」(自由記述)の回答が1件あったことを付記しておく。「保護者が話しながら自分の気持ちを整理し、答えを見つけていくことができるようにする。」がそれである。言わば、寄り添う姿勢を重視する回答である。勤務年数の長い経験豊かなベテラン教員からの意見のようであるが、聴く立場のものに求められる大切なかかわり方を指しているようである。保育士を含めた第二回目の調査結果はTable 2の通りであった。

上表によると、幼稚園教員・保育士が大切であるとして最も高く評定した項目は「5. プライバシーを必ず守ることを約束する。」(評定平均値4.76)で、次が「4. 普段から信頼関係を築けるように心がけ、その上に立って対話ができるよう心がける。」(同4.75)、以下、「6.

子どもの問題について話すとき、保護者を責めるような話の進め方をしない。」(同4.74)、「2. 子どものことを教師(保育士)自身が大切に思っている気持ちが伝わるような対応を心がける。」(同4.68)、「1. 保護者の言葉の奥にある気持ちを読み取れるように努める。」(同4.62)、「3. 保護者と共に子どもの課題や問題などに取り組もうとしている気持ちが伝わるような対応を心がける。」(同4.60)などとなっている。第一回目の調査結果と第二回目の調査結果とでは「5. プライバシーを必ず守ることを約束する」が第二回目の調査で最も高い評定平均値を得ているところが特に異なる点といえるが、それ以外の内容についてはどちらの場合においても、保護者の話を聴くさい、教師・保育士によって大切なものとして選ばれているものは共通していることが知られる。

2. 幼稚園教員・保育士の回答傾向についての勤務経験年数別比較

Table2には第二回目の調査における幼稚園教員・保育士の項目1から項目11までの勤務年数別に見た評定平均値も示してある。(勤務年数10年未満の人たちをA群、10年以上20年未満の人たちをB群、20年以上の人たちをC群と呼ぶことにする。)A群はまだ勤務年数の比較的短い人たち、C群は勤務年数が長く言えばベテランの教員・保育士に人たちである。B群はA群とC群の中間に位置する人たちが中堅層といってよいであろう。

Table2からわかるように、A・B・C三群の評定平均値を見比べてみると、11項目の中で三群ともに共通して評定平均値が上位1~5位に含まれているものがあることがわかる。「1. 保護者の言葉の奥にある気持ちを読み取れるように努める。」「5. プライバシーを必ず守ることを約束する。」「6. 子どもの問題について話すとき、保護者を責めるような話の進め方をしない。」がそれである。このうち、「5. プライバシーを必ず守ることを約束する。」については経験年数の最も短いA群で最も高

く評定され、経験年数が長くなるにつれて評定平均値は低くなっていく傾向がある。「項目1」「項目6」については経験年数による変化傾向は見られない。なお、A・B・C三群のそれぞれにおいて最も高い評定平均値を得た項目はA群の場合「5. プライバシーを必ず守ることを約束する。」(評定平均値:4.83)であり、B群・C群の場合、「項目4. 普段から信頼関係を築けるよう心がけ、その上に立って対話ができるよう心がける。」(B群=4.94、C群=4.77)であった。(C群については「6. 子どもの問題について話すとき、保護者を責めるような話しの薦め方をしない。」も最上位に評定された項目となっていた。

ただ、一方で、「10. 保護者の話が途中で滞ったとき、じっくり待つことができる。」と「9. 必要なときには、関係機関を紹介したり、それらと連携を図るなどして、問題解決にあたる。」の2項目については三群とも評定平均値は最低もしくはそれに近い順位に位置しており、この2項目が特に低かったということについては、今後の詳細な検討が必要のように思われる。

IV 考察

1. 幼稚園教員・保育士の回答傾向 — 他校種教員の回答傾向との比較も考慮して —

幼稚園教員の回答(第一回目の調査方式による)の特徴として、一方においては、教師は保護者との普段からの信頼関係の構築・強化を大切にしながら、保護者の話を聴くにあたってはサポートティブなスタンスを大切に、保護者と一体になって子どもの問題の解決への支援と子どもの教育(保育)・発達支援、保護者の養育支援に取り組む姿勢を大切に、また実践している様子が浮き彫りにされた。この傾向は特別支援学校教員の回答結果とよく似た様相を呈している。(Table1) また、保育士も含めての第二回目の調査結果でも、上に述べた傾向は基本的には同様であった。(Table2)

幼稚園・保育園に共通していえることであろうが、教員・保育士は子どもの登園・降園時において保護者と顔を合わせ、互いに言葉を交わしながら子どものその日の体調や気分、家庭の様子、子どもの一日の活動状況などを細かく話せる機会を多く持つことができる。「連絡帳」や「たより」などによっても、教師・保育士は保護者とのコミュニケーション・連携をはかることができ、子どもを真ん中において互いにつながることができやすい。いわば、教師・保育士は子どもの生活それ自体に、一体となって保護者とともに子どもの課題や問題の解決、教育(保育)・発達支援に取り組んでいける素地を持っているといえる。特別支援学校に勤務する教師が幼稚園教員・保育士とよく似た回答結果を示したのも、上に記し

たような保護者との日常的なつながりの機会を多く持つことができているからであろう。

以上のように、保護者の話を聴くときに幼稚園教員・保育士がサポートティブな姿勢を大切に考えていることは、特別な支援を必要とする子をもつ保護者からすれば、寄り添ってともに子どもと自分、あるいは家族の抱える課題や問題への対処や取り組みの仕方を考えてくれる存在として大きな安心感と信頼感をもたらしてくれるであろう。まさに、ジョン・ボウルビイの強調する「セキュア・ベース」として大きな意味を持つものと考えられる。⁽⁷⁾ 第一回目の調査のさいの回答(「その他」)の中に「保護者が話しながら自分の気持ちを整理して、答えを見つけていくようにする」ことが保護者の話を聴くときの教員の基本姿勢として大切である、と記されたものがあった。この関係こそ、聴き手としてはどの子の保護者に対しても同様に大切にすべきことだが、特に特別な支援を必要とする子どもをもつ保護者にとってはまさに寄り添う姿そのものであり、わが子が発達上の問題や課題を抱えていることをそれとなく感じて不安を抱いていたり、あるいはそうした問題・課題がはっきりしてショックや恐れなどを感じているような保護者の場合には、子どもの現実を受け止めつつ前向きに物事を見ていく勇気と力とを与えてくれることになるであろう。^{(8) (9)} 子どもの発達上の問題や課題のみならず、保護者自身の抱える問題・課題への対処にとっても、きわめて大切なかかわり方を示唆していると考えられる。

一方、上述のサポートティブな回答結果とは対照的に、少し考えさせられる点も幼稚園教員・保育士の回答結果にはあった。それは、第一回目の調査において回答してくれた幼稚園教員において「10. 保護者の話が途中で滞ったとき、じっくり待つことができる」の選択率が他の項目に比べ最も低かったということである。(Table 1) (この点は他校種の教員の場合も同傾向であった。) また、保育士を含めた第二回目の5段階評定においても評定平均値としては最も低い値になっていたということである。(Table2) ただ、後者の場合、最も評定平均値が低かったとはいえ、全11項目の評定平均値はいずれも4点台後半から前半であり、「項目10」についても4.22の評定平均値を示しており、「非常に大切(5)」と「かなり大切(4)」との中間に位置している(「かなり大切」寄り)ことは十分念頭に置くべきであると考えられる。

「項目9。」についても幼稚園教員(保育士を含めた場合も)の選択率(評定平均値)は全11項目中「項目10」に次いで低い結果となっていたことももう一つの回答傾向の特徴といえる。ただ、この場合も、幼稚園教員・保育士による5段階評定平均値は4.30となっており、「項目10」の場合同様、「非常に大切」と「かなり大切」の中間、「かなり大切」寄りになっていることは念頭に

置くべきである。(Table 2) 特別支援学校教員と高等学校教員の場合は異なるが、小中学校教員の場合にも同様の傾向が見受けられる。(Table 1)

「10. 保護者の話が滞ったとき、じっくり待つことができる」についての「聴く力」としての評価が他の項目に比べて低かったことは、幼稚園教員・保育士と保護者とのコミュニケーション・連携という点と、どのようにつながりうるのであろうか。また、「9. 必要なときには、関係機関を紹介したり、それらと連携を図るなどして、問題解決に努めることができる」についての評価の低さについては幼稚園教員・保育士が保護者とのコミュニケーション・連携を図るさいどのような課題を提起しうるのだろうか。くどいようだが、これらの2項目は選択率・評定平均値の相対的な順位としては低かったが、それぞれの項目が幼稚園教員・保育士に軽視されているということではないことは断っておきたい。したがって、ここでは、問題を少し一般化した形で「幼稚園教員・保育士と保護者とのコミュニケーション・連携において、上記2点がうまく機能しなかったときにどのようなことが生じうるであろうか」というテーマに置き換えて検討してみたい。

保護者の話が途中で滞る（沈黙が生じるということも含めて）ということは決して珍しいことではない。悩みや問題などを抱えているときはなおさらである。特に保護者の沈黙に直面したとき、聴き手である教員・保育士にとっては応対において大きな試練となるであろう。保護者の次の言葉をじっくりと待つ余裕が持てず、不安や、あせりや自信喪失、自責感（自分が相手の沈黙や言いよどみの原因を作ったのではないかと考えてしまう）などに襲われることがあるのはむしろ自然なことであろう。間を埋める「気の利いた言葉」を一生懸命探すことに夢中になってしまい、話の滞りの状態の中にある保護者のこころの動きや「物語りの流れ」⁽¹⁰⁾ から外れてしまい、結果としてコミュニケーションにズレを生じてしまうということが起こるかもしれない。あるいは、寄り添う姿勢が崩れて、聴き手主導の形で対話を聴き手の枠組み（世界）の仲に引き込んでしまい、結果的には保護者の話しを共感的に理解するスタンスから遠のいていってしまうということにもなりかねないかもしれない。

必要なときには関係機関を紹介したり、これらと連携を図りながら保護者や子どもの問題や課題、悩みなどの解決に努めるという選択肢をもっていないと、幼稚園教員や保育士は問題を自分で背負い込んでしまう（抱え込んでしまう）ことにつながりかねず、結果的に自分を心理的に追い込んでしまうということも時に生じうる。教員・保育士のメンタルヘルスは、保護者とのコミュニケーション・連携にとっても子どもとのよいかかわりにとっても欠かせない大切なことである。幼稚園教員・保育士

に限らず、保護者や子どもとかかわる立場の人たちは、一人で抱え込まず、必要と判断したら関係機関や専門家につないでいく（リファーする）勇気を持つことが必要であろう。

2. 勤務年数別の回答傾向の比較

Table1 からうかがえるようにどの年数群でも「項目1」「項目5」「項目6」についての評定平均値は高位に属し、これらの項目に記されている内容が保護者の話を聴くさいに重要であると考えられている傾向がうかがえる。しかし、勤務年数の長短による明確な違いは見出せないようであった。前項でも記したが、幼稚園教員・保育士全体の回答から見たとき、「項目9」「項目10」の評定平均値は他項目に比べ、相対的に低位であったが、どの年数群においても共通して低い傾向にあった。ただ、評定としては「非常に大切」「かなり大切」の間にあることは注意すべきである。このことは、保護者や子どもの抱える問題・課題について他機関との連携を図ることで解決策を見出していくことや、保護者の話が滞ったとき、それを待つことが保護者とのコミュニケーション・連携において、もっと配慮されるべきであるという受けとめ方もできるが、この結果の受けとめ方については慎重な考察が必要であろう。ここでは、幼稚園教員・保育士の場合、サポート的な応対がより重要視されているようだ、ということでもとめておくことにしたい。今回の調査結果は幼稚園教員・保育士の側から見た「聴く力」の内容についての検討であったが、より保護者のニーズにマッチした「聴く力」となるためには保護者の側からの評定も重要と思われる。この点を踏まえての上記の結果について考察が今後求められる。

3. 「沈黙」の意味について

Stewart (1981)⁽¹¹⁾ は著書の中で、「カウンセリングにおける沈黙」というテーマにつき、次のように述べている。

「クライアントが沈黙したとしても、それはそこでカウンセリングが中断（休止）状態になったというふうには考えないほうがよい。むしろその沈黙はクライアントがこころのなかに今まさに浮かんできた気持ちや情緒について考えている時間なのだ。」

沈黙はこのように話し手本人にとって大切な意味を持つものである。聴き手はこの点をしっかりと認識して、とにかく見守り、寄り添うことで話し手の新たな思考の流れについていくという姿勢が大切だということであろう。もし、保護者が子どもの発達上の課題や問題を直視できず、自責感情に苦しんでいる場合などであれば、こうした応対は特に大切なこととなってこよう。

4. 特別な支援を必要とする子どもの教育（保育）・発達支援への示唆

今回の調査結果から、幼稚園教員・保育士は温かい態度で保護者とのコミュニケーション・連携を図ることをとりわけ大切なことと考えていることがわかった。さまざまな理由から特別な支援を必要とする子どもの保護者にとっては、このようなスタンスは大変話しやすく、保護者自身のこころの内側（悩み・不安・迷い等）を出しやすいコミュニケーション関係の基盤となっていると思われる。しかし、保護者の話をさらに深く「聴く」ことが出来るためには、時に滞りがちな話の流れに見守りをもって寄り添っていくことが大切と思われる。これは保護者のこころの安定につながり、ひいては保護者と子どもとのかわりがより余裕を持って進められるためにも求められるものではないかということが示唆される。

V 今後の課題

保護者側からの「聴く力」についてのとらえ方についての調査を行い、幼稚園教員・保育士側のとらえ方との比較検討をすることで幼稚園教員・保育士のとらえる「聴く力」の内容が保護者のニーズに合致したものとなっているかを振り返り、もしギャップが存在するならそのギャップを埋めていくことで保護者とのコミュニケーション・連携をよりよいものにしていくことであろう。特に発達障害等により特別な支援を必要とする子どもの場合、幼児期には子どもの状態の把握がむずかしいことも少なくなく、特にこの時期では、保護者のこころが揺れ動くことも少なくないので、教師・保育士が保護者の話を「聴く力」をさらに保護者のニーズに沿ったものにしていくことは、保護者が安心して子どもの日々の養育に取り組め、将来の見通しが持てるようにコミュニケーション・連携を図っていく上でも重要なことである。また、「聴く力」について考察していくさい、「聴く」ということの意味をきちんと理解してかかることも重要である。^{(12) (13)} この点にも留意しながら教師・保育士の「聴く力」を向上させ、保護者（さらには幼児児童生徒）とのコミュニケーションあるいは連携のよりよい方向を探っていくことも今後の大きな課題としてあげられる。このことが、特別な支援を必要とする子どもに限らず、すべての子どもの教育（保育）・発達支援に弾みをつけることになると考えられる。「関係発達の視点」からの検討は、そのさい、重要な情報と手がかりとを提供してくれるように思われる。⁽¹⁴⁾

謝 辞

本研究をすすめるにあたり、幼稚園・保育園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等の教員・保育士等のたくさんの方々に調査等において大変お世話になりました。快くご協力・ご支援いただきましたことに心から感謝申し上げます。

文 献

- (1) 佐治守夫・岡村達也・保坂亨著『カウンセリングを学ぶ―理論・体験・実習―』東京大学出版会、1999年、Pp. 17-22
- (2) ドナルド・マイケンバウム著（根建金男・市井雅哉監訳）『ストレス対処法』講談社現代新書、1994年、P. 138
- (3) 栗原輝雄著『特別支援教育をどうすすめていくか―学校臨床心理学の新たな課題―』ナカニシヤ出版、2007年
- (4) Featherstone, H. "A Difference In The Family; Life with a Disabled Child" 1980、Basic Books, P. 91
- (5) 中田洋二郎著『子どもの障害をどう受容するか―家族支援と援助者の役割―』大月書店、2005年、Pp. 86-90
- (6) 下山晴彦著『心理臨床の発想と実践』（心理臨床の基礎1）岩波書店、2000年、Pp. 109-114
- (7) ジョン・ボウルビー著（二木武監訳）『母と子のアタッチメント―心の安全基地―』医歯薬出版、1993年
- (8) Pearl S. Buck "The Child Who Never Grew" Woodline House, 1992
- (9) (4) に同じ
- (10) (6) に同じ
- (11) Stewart, J. C. "Counseling Parents of Exceptional Children (2nd. ed.)" Bell & Howell Company, Pp. 90-91
- (12) (3) に同じ
- (13) 栗原輝雄「幼児児童生徒とのコミュニケーションおよび教育（保育）・発達支援の基盤としての教師の「聴く力」について―教師を対象とした「聴く力」についての調査から―」三重大学教育学部研究紀要第59巻（教育科学）2008年、（印刷中）
- (14) 鯨岡峻著『〈育てられる者〉から〈育てる者へ〉―関係発達の視点から―』日本放送出版協会、2002年